

『青森県史 資料編 近世6』

幕末維新期の北奥』

工藤 威

第三節 近世北奥の終焉と近代への模索

第四章 近代移行期の文化・教育と信仰

第一節 近代移行期の文化・教育

第二節 近代移行期の信仰

本書は、近世編の最終巻だそうである。この幕末維新期は近世の最後であるともいえるし、近代の最初であるともいえる。解体と成立が重層する所謂「過度期」である。「はじめに」によると、近世編全体の編集方針として、北奥における蝦夷地の存在との係わりと「変容」に重点を置いておられることである。

以下、目次を紹介することから始める。

第一章 幕末・維新期の政治過程

第一節 嘉永六年～安政五年の政治過程

第二節 安政六年～慶応三年の政治過程

第三節 明治元年の政治過程

第四節 明治二年～四年の政治過程

第二章 開国と北奥

第一節 箱館と蝦夷経営

第二節 幕末における殖産と富国

第三節 藩領を越える人と情報

第三章 維新期の北奥社会

第一節 戊辰戦争と民衆

第二節 藩領支配の変動と混乱

各章の冒頭に「解説」がおかれ、各資料理解の便宜をはかるといって構成になっている。この構成は、先行した『新編弘前市史』資料編と同様

のものであるが、一般的には、刊行継続中の『山口県史』史料編のように、最初に「解説」（35頁、参照したのは「幕末維新4」）を置き、各章ごとに1～2頁の「解題」をおくという構成になっているようである。

一人の筆者が巻全体を解説しているので、全体を俯瞰できるといって面では『山口県史』のようなタイプが便利であるし、各章ごとにより詳しく担当者の編纂意図が示されているという点では、本書の構成のほうが利用者にとっては使いやすいように思われる。

限られた紙数で各資料全般を紹介するのは無理なので、各章ごとに注目される資料にふれながら紹介する。

第一章では、第三節の「明治元年の政治過程」が興味深い。取り分け戊辰戦争期における盛岡藩、八戸藩、弘前藩の三藩の動向を比較しながら見通せるのは有難い。特に資料一四四の「八戸藩士諸伺」の中の、藩の方針を問う岩泉大七に対して、二項目に渡って「難被及御沙汰候」と藩庁側がこたえているのが面白い。これでは出張してもどのように対応してよいのか迷うだろうな、と思わず同情してしまうし、藩庁側にしてはどう指示してよいのか見通せなかったものと思われる。また、盛岡藩

榎山佐渡と秋田藩茂木筑後の応酬の資料（資料一七三―一七六）や戊辰戦後の斗南藩の成立関係、弘前藩の帰田法関係、弘前藩士による弾正台への出訴関連資料、も見逃せない。

第二章をみると、第一節では、箱館をめぐる北奥諸藩の経済的動向を知りうる諸資料や蝦夷地警衛関係、軍備増強への努力関係、がまとめられている。第二節は三本木開発関係の資料群である。特に、資料四七六、七の新渡戸十次郎の「昭瑤漫筆」一、二のポイントをおとしての三段組の全文翻刻は貴重である。

第三章第一節は、弘前藩の軍制改革を知りうる資料、東北戦争期に関連するものが纏められている、筆者が注目したのは、第二節の斗南藩および七戸藩成立に関するもの、特に「維新雑誌七」である。旧会津藩士浅羽忠之進の編纂したものという。これも三段組を駆使して全文を翻刻してくれたのは有難い。同様に、七戸藩関係では、新渡戸伝日記の翻刻も貴重な仕事である。「解説」に七戸で藩政日記が発見されたが収録できなかった旨が記されている。この資料も取り込めたらよりいいものになったであろうと筆者も残念に思うところである。

第四章第一節では、種痘を中心とする洋学の受容関係、蘭学をはじめとする学校関係、二節では、神仏分離関係や招魂祭関係、ロシア正教関係の資料が扱われている。少し気になったのは、「解説」の平尾魯仙の下沢保躬宛書簡の年代比定についてである。同じ県史の学芸編での比定を訂正するのであれば、その根拠を補注のような形で示す必要があったのではないだろうか。

本県のように県域が、旧藩時代の盛岡藩、八戸藩、弘前藩にまたがっ

ている場合には、自治体史という公的な仕事でもあり、その資料の選択掲載には相当に苦心されたものと理解される。つまりはバランスを重視し配慮せざるをえないということである。しかも、限られた紙幅頁数のなかに可能な限り多くの資料を盛り込もうとすれば、なお更に編纂の苦心工夫が必要であったと推察される。単独の藩の場合であれば、一つの項目により多くの資料を取り込めるが、三藩にまたがるとなればそれぞれが薄くなるのは致し方ない。その反面、三藩を比較できるという利点もある。

史料集には「編纂型」と「独立型」があるようである（この分類名は筆者が勝手に作った）。前者は、綱文・項目があつて関連資料を他の多くの資料から切り取って編纂するもので、後者は単独のまとまった資料を編纂したものを指す。例えば、前者は筆者がよく参照した『復古記』や『鹿児島県資料』等がこれに当り、後者は、『茨城県史料』幕末編Ⅰ（これには徳川斉昭と老中阿部正弘の往復書簡集を斉昭自身が編纂した「新伊勢物語」が入っている）や少し前に刊行を知って入手した幕末期の秋田藩家老の日記『宇都宮孟綱日記』などがそれにあたる。長所としては、既にふれたように前者は同じ問題に関する多くの資料にふれられ比較できるということ、後者はまとまって一群の史料をみることでできるといふ点に求められるように思う。「編纂型」は気になったときに事典を引くように必要に応じて摘み食いに参照すればよいだろうし、「独立型」は長編小説を読み込むように問題点を探りながら使えばよいように思う。本資料集は「編纂型」の資料集ではあるが、先にも触れたようにその中に重要だと編者が判断した「独立型」の資料を組み込むと

いう工夫がなされている。限られた頁数の中での工夫として利用者はその苦心を多とすべきであろう。

ただ、無理を承知でお願いするのだけれど、別巻という形ででも巻頭のグラビアで紹介している「松前箱館雜記」、浅羽忠之助「維新雜誌」や弘前藩の「御軍政御用留」等を「独立型」の史料集として翻刻してもらいたいと思うのである。

収集した大量の資料の中からエッセンスを切り取って編むということは大変な作業である。勿論、切り残された資料群は今後の「通史編」に活用され、それぞれの判断が示されるのだから、非常に楽しみである。また、巻末の「掲載史料・所蔵先・略記一覧」は、本資料集を足掛りにして更に研究を志した場合には非常に役立つものだと思われる。原資料に当たりたい場合や掲載史料の周辺を調べたい場合などには重宝するものと思われる。

(A4判、七九四頁、二〇一五年三月刊、青森県、

本体価格五五〇〇円＋税)

(くどう・たけし 東京都立若葉総合高等学校教諭)